国際赤十字救護班に参加して ～エチオピアの惨状～

府内　秀子（熊本赤十字病院婦長）

三月末にエチオピアから帰国して、再び日赤で看護婦として頑張っています。以前、カンボジア国境の救援活動に二回参加したことがありますが、今回の救援活動は、その規模の大きさと悲惨さで、もっとも印象的なものとなりました。

◇

被災地に着いてから、政府高官の説明を受けましたが、この大旱ばつは、国土の四〇％あった森林が無計画な開発で五％ほどに減ったことに起因しているということでした。確かに、現地の人の努力の甲斐なく、畑に植えられた主食の白トウモロコシ、テフ（アワのようなもの）は、わずかしか伸びず、見るも無残な姿をさらしていました。森林が少ないための現象だと思うのですが、水の流れが異常に速かったことも印象的でした。

ある日、ラジオで近くの高地に大雨が降ったというニュースを聞いたのですが、それから数時間後、干上っていた川が、あっという間にあふれんばかりに増水したのです。現地の人たちが喜んだのも束の間、翌日は再び干上ってしまいました。「なぜこんなに早く……」という悔しさはまだ忘れません。植林の重要性を改めて知らされた気がします。

◇

主な仕事は、給食センターの運営でした。一つのセンターで対象が二千人もいるのですから、目が回るくらい忙しかったですね。六カ月の間、二カ月ずつ三カ所を回りましたが、低地のアサイタでは日中気温が五十度近くまで上がり、逆に夜は寒くなるといった具合で、厳しい気候でした。寝るときは室内でも毛布がいりました。

外国人のボランティアの人々と接していて気付くことは、自身を大切にしない人はボランティアとして成功しないということです。彼らは、疲れるとまわりを気にせず休みます。実際、私たちの中には、無理がたたって肝炎を患い、帰国した人も出ました。

◇

被災地を訪れると、どこも半数近い人たちが栄養失調の状態にありました。栄養失調でない人も、ひもじそうで目に生気がなかったですね。こうした人々には食料が最高の薬です。給食活動を始めて一カ月もたつと、衰弱の激しかった子供たちもみるみるうちに回復して、遊べるようになりまして、ほっとしました。

ただ、栄養失調状態で病気にかかると大変です。抵抗力がなく、死につながります。コレラのような伝染病で多くの人がバタバタと死んでいったこともありました。患者さんたちの治療にあたった私自身も下痢をしてしまい、「ひょっとしたら」と青ざめたこともしばしばでした。

◇

日本からの救援物資は続々と届いていますが、特に熊本から送られてきた給水車を見たときは嬉しかったですね。阿蘇山とお城のマークがついていたんですが、正直、涙が出るほど励まされました。

短い半年間でしたが、被災地はいつも暗かったというわけではありません。現地の人たちの栄養状態が良くなってくれば、ささやかなパーティで交流を深め、笑い声も起こりました。

こちらに帰ってきてからは、「私たちは恵まれている割に、喜びが少ないのでは」としばしば考えさせられることがあります。

この人と30分

グループが長続きするのは―。学生時代の友だちだからという一言に尽きます。

ボニージャックス　玉田元康さん

三月二十八日、東京、帝国ホテルで開かれた『グルメの夕べ』を美しいハーモニーで盛り上げてくれたボニージャックス。

なかでも、リーダーの玉田さんは、熊本は本渡の育ちということです。歌い終わって、控え室で休む玉田さんを訪ねてみました。

――歌はいつ頃から始められましたか。

天草高校を卒業してから、早大の英文科に入学しまして。その時、グリークラブに所属したのがきっかけです。しょっちゅう、演奏旅行に出かけていました。いつも同じスタイルではつまらないということで、時々、各パートのリーダー四人で独唱なんかしていたんですが、今のメンバーはその時のメンバーなんですよ。

――最初からプロになろうと。

とんでもない。それぞれ就職試験を受けていましたし、僕も一次試験は通って、真面目に就職を考えていた。ところが、きっかけというものがあるんですな。TBSの「青春ジャズ大学」という、当時、プロへの登龍門ともいえる音楽番組があって、卒業の思い出づくりにでてみたんです。そしたら、審査をしていた先生がベタぼめで、みんなが「ひょっとしたら……」という色気を出してしまった。同期生には、名古屋から出てきた伊藤シスターズ、のちのザ・ピーナッツがいましたよ。彼女たちは、またたく間にスターになってしまいましたが、確かに歌はうまかったですね。

――ダーク・ダックスやデューク・エイセスと比較されることは。

ダークは僕らが学生のとき、すでにプロになっていた。特にお互いライバル視ということはないですね。今でも年に二回は、三グループ合同のゴルフコンペをしたりして仲良くやっています。

なにしろ、男性コーラスは若い連中がでてこないし。我々は、歌い続けるうちに高齢化していく。「三グループしかないんだから、まあ元気で頑張ろうや」って感じかな。

――ボニージャックスの歌の特徴は。

我々ボニーは、「泥臭い」というのが特徴ですかね。日本の情緒的な歌を日本語を大切にしながら歌うというのを信条にやってきました。

ダークも選曲は我々と似ているんですが、歌い方は軽妙でしゃれた色あいを出している。あちらが慶応の学生グループで、スクールカラーの違いといえばそれまでですが。

デュークはパンチのきいたジャズ調がうまいですね。

――月並ですが、グループが長続きする理由は。

学生時代の友達だからという一言に尽きますね。よくケンカをする。でも、ケロッとしている。そんな関係がここち良くてね。いつでも学生気分なのかな。見た目も若いでしょ。ヒゲを剃るともっと若くなる。

――県人会にはよく出られますか。

ええ。天草出身者の集まりとか、県人会にはよく出ます。最近はあまり熊本に帰っていないもんで、余計にそういう場が恋しい。

でも、今日のパーティのように、熊本をあまり知らない人たちに熊本の味を紹介するなんてのはいいですね。とてもいい。みなさん、郷土料理を大変興味をもって味わっていました。私も工夫された料理の数々に改めて熊本の良さを知りましたよ。

〈プロフィール〉

昭和33年　仲間三人とボニージャックスを結成。
昭和37年　「小さい秋みつけた」でレコード大賞童謡賞受賞。
昭和49年　芸術祭大衆芸能部門優秀賞受賞。
昭和57年　日本童謡協会童謡賞受賞。

ボニージャックスのレパートリーは、世界各国の民謡、ジャズ、ポピュラー、日本の叙情歌、童謡など幅広く、五千曲を超えている。

玉田さんのパートはバスで、愛称は、ノボさん（のんびりとぼんやりをもじって）。